

〈エクステンド〉と怪獣が現れるのは一か月に一度だけ。だから、その空を裂くような轟音が響き渡るのも、両者が来訪する時だけで。本来は「三度目」の轟音など鳴り響くわけがなかった――



ゲームセンターから飛び出した、夕星はその圧倒的スケールを目撃することになった。

何本かの道路を跨いだ先に〈エクステンド〉が着地する。脚部装甲から露出した緩衝器サスペンションが伸縮。背中に集約した排熱口からは熱を帯びた白煙を吐き戻す。

きつと飛翔時に機体内部へと籠ってしまった熱を、逃がしているのだろう。

「すげえ……すげえ！」

これほどまで間近で、〈エクステンド〉を見るのは初めてだ。

二五メートルを超えた鉄の巨人は辺りに暗い影を落とし、ローアングルから見上げることになった夕星は高揚を抑えきれなかった。

機体のパーツ一つ一つから細部の塗装剥げに至るまで、〈エクステンド〉の全てを脳裏に焼き付けようと、瞳を凝らす。

「夕星、何してるんだよ!？」

少し遅れて、十悟もゲームセンターから飛び出してきた。

「何って、〈エクステンド〉がこんなにすぐ傍で見れるんだぜ！ こんなチャンス滅多にねえだろ！」

「はあ……どうやら君は筋金入りの〈エクステンド〉オタクらしいね。けど考えてもみなよ、〈エクステンド〉が来たってことは、次は何が来るかを」

そう、〈エクステンド〉が飛来したからには、それと対峙する存在が現れるのが常だ。

向かいの空からは本日四度目となる轟音が迫り、〈エクステンド〉の正面に着地。相も変わらずビル群を薙ぎ倒しながら、粉塵を舞い上げるようにして現れた。

当然、二人の視線もその姿へと。粉塵が晴れて、次第に露へととなっていく怪獣の姿へと集約される。

だが、その怪獣には違和感があった。

「ちよっと待って……あの怪獣、何か変だ！」

十伍の言葉通り、その怪獣の様相は、これまで現れては〈エクステンド〉に倒されてきた他の有象無象たちとは何かが違う。

昼間現れたザリガニ怪獣のように、今日まで現れてきた怪獣たちは何らかの生物をそのまま巨大化させたかのような存在であった。

対して、今現れた怪獣はどうであろうか？

シルエットこそアスリート然とした男性らしいものだった。

けれど、その全身はゴムのような質感の皮膚に覆われるだけで、甲殻や装飾らしいものはない。

のっぺりとした頭部には幾何学模様のラインが走るだけで、それは異質な不気味さを醸し出していた。

「うーん……たしかに得体の知れねえ野郎だが、〈エクステンド〉はあんなのに負けねえよ。いつもみたいに、こう、バーン！ って感じで勝つに決まってる！」

「そうだといいんだけどな……とにかく、あの二体にここまで近いのは危なすぎる。どこかのシエルターに身を隠さなきゃ」

十伍は急かすように、夕星のジャケット袖を引いた。

けれど、その判断はわずかに遅い。——向こうで〈エクステンド〉と得体の知れない怪獣が激しく掴み合いを始めたのだから。

互いの巨体が全力でぶつかり合った間には相応の衝撃が生じた。その余波は辺りの瓦礫や、乗り捨てられた車両を軽々と跳ね上げ、夕星たちの小さな体さえも弄ぶ。

「やべっ！」

二人の小さな体は衝撃によって、宙へと舞い上げられてしまったのだ。

夕星は咄嗟に額を庇うも、すぐに重力に引かれて、間近にはアスファルトが迫ってきた。

次いで自分を襲うのは衝撃と鈍痛だ。こんな痛みを味わったのは、中学の頃、親のバイクを無断で借りた拳句にノーヘルノー免で転倒させたとき以来であろうか？

「ツツ……痛ってえな」

それでも切れた額の血を拭い、砂埃の向こうで十悟の姿を探す。

「おい……十悟ッ！ 大丈夫か！」

「ギリギリ！ 運がよかったみたいだね」

その白い学ランには汚れ一つない。きつと、あの土壇場で華麗に受け身を取ったのであろう。自分が思い切り頭を打ちつけたというのに、この悪友は本当になんといいかだ……

「下手に動き回るのは危険だ」と、無言で顔を見合わせて、夕星たちはその認識を共有する。

周囲に落下の恐れがある看板や、千切れる恐れのある電線がないことを確認した二人は手頃な建物の物陰へと身を滑り込ませた。

「悪いけど夕星……俺はしばらく〈エクステンド〉のことも嫌いなさうだよ」

「ははっ。なら、掌を返す準備をしておくんだな。〈エクステンド〉がああ怪獣をブチのめす瞬間に備えて」

嵐が過ぎ去るのをじっと待つように、二人はこのまま事態の収束までやり過ごすつもりだった。

だが、それは〈エクステンド〉が怪獣に勝利すると言う前提の防衛策でもあった。現に夕星は、〈エクステンド〉の勝利に何の疑いも持っていない。

これまでの日常がそうであったのだから――

不意に向こうで怪獣が構えを取った。上腕で腰から上をガードし、小刻みなステップを踏むために爪先を上げたのだ。その立ち姿はまさしく、

「ボクシング!?」

怪獣の振る舞いがボクサー然としたものに変わる。

何もない剥き出しの拳にはグローブが嵌められているじゃないかと錯覚する程に、その振る舞いは胴に入ったものでもあった。

「けど、なんで？」 夕星たちがそんな疑問を口にするよりも早く、怪獣はショートジャブの連打を繰り返す。

「野郎ッ……けど残念だったな！ 〈エクステンド〉の全身を覆う装甲は単純な打撃程度、効きやしねえんだよ！」

現に夕星の言葉通り、〈エクステンド〉は拳の雨に晒されながらも、腰を落としながらにカウンターを狙っていた。

「いけえ、〈エクステンド〉！ ラッシュュが途切れた瞬間がチャンスだ！」

「いや……ちよっと待つんだ夕星……」

一発目の拳を打ち込んだ時点で、あの怪獣も〈エクステンド〉の頑強さや打撃の危機の悪さに気づくチャンスはあったはずだ。

それでも尚、拳を撃ち続けるのは、あの怪獣がボクシングしか出来ないからなのか？

「あの怪獣は他の怪獣とは何かが違う……俺にはアイツが何かを狙っているように思えてならないんだよ」

そんな十伍の予感が、次の瞬間に的中した。怪獣がまた構えを変えたのだ。〈エクステンド〉が渾身のカウンターを放つために無防備にならざるを得ないその一瞬を狙って。

ボクシングの構えがスピードと連撃をウリにしているのなら、その構えは先ほどと真逆。足裏を地面にベタで接し、腰の捻りから繰り出されたその張り手は中国拳法で言う「発勁」である。

「なっ……!?!」

〈エクステンド〉の腹部を覆う装甲が、火花と共に剥離する。

まるでガラス細工を砕くように。機体を支えるフレームが断裂、引きちぎれたコードや機体を巡る液状燃費がまるで臓物の用に飛び散った。

脇腹を抉られた〈エクステンド〉が膝を着こうと、怪獣の勢いは止まらない。寧ろこの千載一遇のチャンスに、その本能が昂るのである。

もう一撃、打ち出された発勁は〈エクステンド〉の頭部を精密に捉えていた。

その衝撃に弾かれた頭部は空中に山なりの弧を描き、やがて夕星たちのすぐ側へと降ってきた。

「危ないッ！」

咄嗟に十悟に腕を引かれる。今、彼が腕を引いてくれなければ、透馬は飛んできた〈エクステンド〉の生首の下敷きになっていただろう。

「……………う、嘘だよな」

落下したそれは最早、頭部とわからぬ程に大破していた。装甲板が怪獣の掌型に凹み、翡翠色をしたカメラアイは数度明滅するも、そのまま彩度を失ってしまう。

今、この瞬間。数多の怪獣を倒し続けてきた〈エクステンド〉が、初めて怪獣に敗北したのだ。